付章

相談室の事例から

江戸川区教育研究所教育相談員　中原美恵

1．語られないいじめられ体験

教育相談室で出会う不登校のケースの中には、なんらかのいじめられ体験を持ち、傷ついている子どもが少なくない。しかし、彼らは、なかなかそのことを語ろうとはしない。切れ切れに浮かんだそれまでの子ども時代のエピソードをていねいに繋いでいって、やっとかすかにそれがつかめるといった感じである。なかなかその心の傷は癒されないものなのであろう。われわれがうっかりそれに触れようとすると、彼らは、過敏に反応し、心を閉ざしてしまう。いじめられた子ども自身がその体験を客観的に語れるようになるまでには、相当の時間が必要なのである。

そんな彼らの様子を見ていると、いじめられて、自殺にまで追いやられる子どもの心情は、決して特別なものでないという気がする。われわれに見えない世界で、子どもがどのような体験をし、どのような思いを抱いているのか。学校でも、家庭でも、それをおとながどれだけ察したり、感じとったりできているのだろうか。

ここでは、相談室の事例を通して浮かんでくる、小学校時代のいじめられ体験とその意味について考えてみたい。事例としては、典型性の高いケースを、低学年、高学年の学年段階ごとに１つずつ取り上げた。どれもいじめられていた当時は、周囲が気づかず、後に深刻な症状が出てから、やっと注目されるようになったものである。内容は、プライバシーの保護のため、多くの事例に共通して見られる状況を取り出してまとめた。

2．発達がゆっくりな子にとっての学校

低学年では、心身の発達がゆっくりしている子ども、なんらかの軽いハンディキャップを持っている子どもたちの体験を取り上げたいと思う。

ケース１：２学期になって、登校時に嘔吐を繰り返すＡ子（１年生）

肥満傾向があり、動作も言葉もゆっくりで、普通学級でやっていくのは、ちょっと大変かなというＡ子ちゃんが１年生になった。気持ちがやさしい、明るい子なので、学級担任にもかわいがられ、１学期は、楽しく登校した。身のまわりのお世話をする子もいて、母親の心配をよそに順調な学校生活だった。

それが２学期になると、毎朝、登校を渋り、玄関で吐いてしまうようになった。迎えの級友の声にも、おびえたように反応し、母親にしがみついてしまう。学級担任も戸惑い、いつもよくお世話をしてくれる子に迎えを頼んだりしたが、状況は変わらなかった。

ちょうど運動会の前で、学校全体が慌ただしく、１年生も練習に忙しかった。学年全体のリズムの練習なども頻繁にあった。着替えの遅いＡ子ちゃんは、いつもまわりに急がされていた。全体の動きに合わせることが求められるようになると、それについていけない子が目立つようになる。Ａ子ちゃんは、「ぐずな子」「にぶい子」の代表になり、それにかかわって級友たちも教師から注意を受けることもあった。お世話係の子は、なんとかＡ子ちゃんをみんなと同じに動かそうとした。無理やり、衣服を脱がせようとしたり、中には、「やめて」と泣きながら抵抗するＡ子ちゃんをつねったり、ぶったりする子もいた。お世話係の子どもにとっては、それは全く正当な行為として意識され、エスカレートしていったようだった。

学校では、Ａ子ちゃんが黙ってされるままになっていることが多かったので、学級担任は気づかなかったようである。この時期、担任自身も気忙しく、子どもたちに指示だけして、学級を離れなければならないことも多かった。Ａ子ちゃんが泣いていることがあっても、Ａ子ちゃんの説明ではさっぱり状況がつかめないし、それにつき合っているゆとりもなかった。そこで、本人が「保健室に行きたい」と言えば、落ち着くまでそこに置いてもらうという対応をしていたようである。

１）家庭と学校のとらえ方のずれ

こうしたケースでは、家庭から子どもの状態を伝えても、学級担任には、意外な感じで受け止められることが多い。親は、学校の友だち関係で何かが起こっているのではないかと心配するが、学級担任にはそうは思えない。もともと、普通学級での指導が難しいと限界を感じている担任だったりすると、むしろ親の訴えに、「問題の本質は、級友との関係ではなく、この子がみんなとやっていけないこと（発達のレベル）なのではないか」という思いが強く出てくるようである。

とくに、学校行事などの後は、こうした傾向が強まる。全体の動きの中で、他の児童との力の差が目立ち、対応に苦慮すると、学級担任の負担感も膨らむ。子どもたちの姿から自分の指導の成果が問われると感じられる場面では、なおさら負担感が意識されてしまうかもしれない。学級担任が「やっぱり、この子は、普通学級では、無理なのではないか」という心境に追い込まれる可能性も高い。転勤してきたばかりの教師や経験の浅い教師、慣れない低学年の指導に戸惑っている教師など、教師の方になんらかの事情がある場合は、余計に揺らぎやすいのではないだろうか。

しかし、こうした学級担任の心境をまっすぐに伝えられると、親の方は動揺してしまう。落ち込んでしまう親もいれば、逆に、教師の指導の不適切さを取り上げ、怒りを向ける親もいる。どちらの場合も、子どもの状態への理解は、進まないままになりがちである。「この学級でやっていけるか、いけないか」をめぐって、家庭と学校の関係がどんどんこじれていくケースもある。

発達がゆっくりな子どもを受け入れたクラスの教師や子どもが、負担感を膨らませている状況こそが、検討される必要があると思われるが、なかなかそこに目が向けられない。結局、発達がゆっくりしている子の存在そのものが「是か非か」問題とされ続けることになってしまうのである。A子ちゃんの場合、何度もこうした体験を味わった。

2）A子ちゃんの「存在」をめぐって

こんなとき、子どもたちの世界では、何が起こっているのであろうか。A子ちゃんのクラスでの子どもの心の動きをみてみよう。

子どもたちは、おとなの思いに敏感である。「手がかかるけれど、気持ちのやさしい子」と、学級担任がA子ちゃんを受け入れ、クラスの一員として存在を認めていた時期には、お世話をしたがる子が何人もいた。1学期の間は、A子ちゃんのまわりにいることで、そういう子どもたちは、教師の注目を集めることができた。学校生活にもゆとりがあり、A子ちゃんのお世話をすることで、学級担任に認められるのもうれしかったのであろう。

ところが、2学期になると、運動会の練習に代表されるように、学校全体の雰囲気が慌ただしくなった。急いで行動すること、難しい課題にそろって取り組むこと等、子どもたちの生活も忙しくなった。そうした中で、A子ちゃんにかかわることの意味も変わった。お世話をしても認めてもらえないばかりか、A子ちゃんが「遅れる」ことで叱られる場面も出てきたのである。お世話の指示だけされても、子どもたちには負担が大きすぎた。それで、思い通りにA子ちゃんが動かないと、つい、手が出てしまうということにもなったのであろう。なんとなく学級担任もA子ちゃんを負担に思っていることが汲み取れてくると、子どもの中の負担感も大きくなり、罰を与えて当然という思いもあったかもしれない。自分たちとちょっと違う子として、彼女を見るようになってしまっていたのである。

A子ちゃんは、親にも担任にも何も言わなかったが、お世話係の女子たちを避けるようになった。自分のまわりにその子たちが集まってくると、すぐ保健室や給食室に逃げ込んだ。学校には、母親と一緒に登校するという形で、毎日やって来れるようになったが、教室以外の受容的なおとなのいるところで過ごした。結局、学級担任と母親の信頼関係は、回復しなかった。

その後、2年生に進級し、教室に入れるようになっても、一日中、ほとんど声を出さない子になった。クラスでまとまって何かに取り組もうというときは、A子ちゃんは、よく校内で行方不明になった。もう、積極的に探そうという子もいないし、学級担任も他の先生に探してもらう方がいいだろうと、自信をなくしていた。そういう中で、「やっぱり自分はこのクラスにいない方がいいんだ」という確信を持ったと言い、A子ちゃんは3年生から全く登校できなくなった。自分にも、級友にも、教師にも、ある種の絶望感を抱き、心を閉ざしていったように見える。

最近、1年生が個性派ぞろいで、学級担任が四苦八苦しているという話をよく聞く。いろいろな子どもがいて、待ったなしの対応を迫られるときだけに、教師の心のゆとりが問われてくるように思う。どの子も大切なクラスの子であり、みんなで楽しく育っていこうという関係を積み重ねていくことは、低学年の学級担任の大きな役割である。それには、教師を支える校内体制が不可欠なのだと、改めて思う。

3．うまく自己主張ができない子にとっての学校

高学年では、教師から見ても、どこかひよわで、自己主張が苦手な子ども、友人関係に難しさが感じられる子どものケースを取り上げ、彼らの対人関係の特徴をみてみたい。

ケース2：友人のからかいが激しくなり、喘息発作から不登校になったB男（5年生）

色白で、大柄でちょっと太めの気の弱そうなB男君は、4年生の3学期に転校してきた。いつもにこにこしていて、突然、ひょうきんなところを見せることもあり、男の子たちからは、いろいろなニックネームで呼ばれていた。例えば、お楽しみ会の出し物で、自分からおばさん役を買って出て、その後、「でぶおばさん」とか「ブタ子さん」とか言われることもあった。本人もにこにこして合わせているので、まわりの子は、おもしろがって続けた。

5年生に進級し、クラスも学級担任もかわった。転任したばかりで様子のわからない学級担任に、彼は、親切に学校のことを教えてあげたりしていた。人なつっこい、やさしい笑顔が5年生にしては幼い感じだったが、新しいクラスでも、B男君のまわりはにぎやかで、彼の笑顔が消えることがなかった。何をされても嫌と言わないので、忘れ物があるとB男君のものを借りに来たり、宿題を写させてと言う子が次第に多くなっていった。周囲からの要求がエスカレートしていく傾向が少しずつうかがえるようになった。

社会科見学の折、バスの中でマイクを握り、大いにB男君は歌った。次々とリクエストが出るし、「ぶーちゃん、最高！」といった掛け声も聞かれた。おやつも弁当の時間も級友たちがにぎやかに取り囲み、楽しそうに見えた。しかし、その日から喘息発作がひどくなり、ぽつぽつ休みが増えていった。

休み明けに、「おまえ、ズル休みだろう」とあからさまに言う子もいたが、B男君は、相変わらずにこにこしていた。抵抗しないので、おもしろがってからかう子が増えた。学級担任が見かねて注意すると、「先生、いいんです。ふざけてるだけですから」とB男君が言うので、担任もそれで済ませていた。

その後、まもなく彼は不登校になった。誰にもきっかけや原因はつかめないままだった。学級担任が連絡をとると、母親は、力づくで登校させようとしたが、B男君が抵抗し、暴れたので、今は、本人の気持ちが動くのを待っているとのことだった（父親は、単身赴任中で、月に1、2度しか帰宅していなかった）。

学級担任が会いに行くと、ちゃんと本人が出てきて対応し、「べつに、何でもないです。明日は、行けると思います」と明るく答えるのだが、不登校は続いた。

1）なぜ、「ノー」を言えない子になったのか

B男君は、友人関係で「ノー」を言えない子であった。その態度が周囲の子どもを増長させ、からかいやいじめの雰囲気が深刻化した。なぜ、彼が「ノー」を言えない子になったのか。B男君の生育歴をみてみよう。

B男君は、家でも穏やかないい子だった。同居していた父方の祖母に可愛がられ、女の子のようにおとなしく、のんびり育った。母親は、てきぱきとした、知性的な人で、祖母とは価値観も家事のやり方も違っていた。父親は、職人気質の真面目な仕事振りで、一旦、チームで仕事が始まってしまうと、なかなか家に帰れない人のようであった。

B男君は、生まれたときから、対立しがちな祖母と母親の間を取り持ち、どちらにも合わせて暮らすことで、2人の愛情を得ていた。にこにこといい子にしていれば、祖母にほめられ、ひょうきんな楽しい子だと母親に喜ばれるといった幼児期だった。それでも祖母と母親がひどくぶつかると、彼は居場所を失った。相手への非難が含まれている2人からの質問には、「べつに」「知らな〜い」とあいまいに答え、一人遊びに熱中するふりをしていたらしい。

彼が、小学校に入学する少し前に、年の離れた妹が生まれた。活発で自己主張の強い赤ちゃんで、母親は、この子に振り回されるようになった。祖母では、この子は手に負えなかった。自分だけが頼られている感じがして、母親は妹の育児に没頭した。B男君は、ほとんど祖母に預けられ、入学後の世話も実際は祖母がした。

祖母とも母親ともうまくやっていくには、おとなの期待を先取りして、いい子でいるこ

とであり、妹に大切な物を取られても、じっとがまんしてそれを譲ってしまうことだった。いつも母親は忙しそうで、彼から声をかけても用件を言い出せないことが多かった。母親は、そんなはっきりしないB男君の態度が内心不満であった。妹のように、祖母にはっきりと「ノー」が言える彼を期待していたのだった。しかし、それは、B男君にはできなかった。祖母と母親のどちらも彼には大切だった。そして、どちらに対しても、いい子であることが要求され、自己主張することは許されない関係だったのである。

2)「自分」を育てそこなった子どもたち

B男君のように、父親の家族の持つ個性と母親の家族の持つ個性が折り合おうとしない環境で育つ子どもたちは、少なくない。彼らは、どう自分をとらえてよいのか、全く混乱してしまっている。たいてい、おとなが期待する自分を用意しておけば、その場を切り抜けられることは学んできている。そして、がんばって自己主張しても、環境の嵐のパワーの方が強力で、自分をしっかり受け止めてくれる安定した関係に出会えないことも体験してきている。

彼らは、「べつに」とか「いいです、いいです」といった言葉で、深い関係を持つことを避けようとする。それでこちらが引いてしまえば、そのまま何も見えてこない。家を出るときには、さんざん抵抗していたB男君も、クラスの友人の前に行けば、何ごともなかったかのように振る舞うのである。つらいこと、かっこ悪いこと、腹の立つことなどなかったことにして、そうした感情に直面しようとしない。「ノー」が言えないのだから、そういう体験は、「なかったこと」にしてしまうのが、自分を救う大事な方法なのかもしれない。

中には、人との関係に絶望して、動物や草花とのかかわりに救いを求める子どもも多い。テレビゲームでもアイドルでも、自分が夢中になれるものを見つけて、心の穴を埋めようとする子どももいる。とりあえず、おとなが意地を張り、ぶつかり合っているところに巻き込まれない、自分だけの世界を持つことで安定を図ろうとしているのである。そこから次第に彼らは、自分に目を向けていく。自分を支えるものを見つけて、やっと「ノー」が言える自我を育てていくのである。

お互いの違いを認め、その上で伝え合うことができる関係が、対等なヨコの関係である。「ノー」が言える関係は、安定した基盤を持ったヨコの関係である。重要な他者との絶対安定な関係を経て、その相手に「ノー」が言えたとき、自分の第一歩が育っていく。そうした対等な関係を学級内にていねいに広げていくことが、高学年では大切になっていく。まず、身近にお互いに折り合おうとしないおとなの関係があれば、そこで伝え合える関係が生まれるよう応援したい。そして、そのそばで萎縮してしまった子どもたちには、彼らの自我にエネルギーを送る共感的なヨコの関係を気長に続けることが求められてくるであろう。

〔対　談〕

いじめをめぐって

対談

いじめを

深谷和子氏
（東京学芸大学教授）

深谷昌志氏
（静岡大学教授）

世界に知られる日本の「いじめ」

深谷（和）　いじめについては例えば、どういう子がどういう方法をもっていじめるか等の、いじめの形についてはすでに議論が終わっていると思います。今、私が一番関心があるのは、なぜ子どもが仲間をいじめずにいられないかという、いわばいじめのメカニズムについてです。ですから今日はそんな話をやりとりさせていただければありがたいと思っています。

その前にうかがいたいのですが、先ほど出席されたドイツでの「日独シンポジウム」のテーマは何だったのですか。

深谷（昌）　今、ドイツでは校内暴力が非常に盛んになっています。一方、日本ではいじめという暴力を伴わない非行が問題になっています。こうした暴力的なヨーロッパの非行と、暴力を伴わない日本の非行について話し合おうということで呼ばれたのです。東西で子どもの非行について話し合おうというものでした。

深谷（和）　日本のいじめは世界中で有名になっているということでしょうか。

深谷（昌）　そう思います。ただ、ドイツに行ってみてわかったことは、いじめという言葉だけが世界中に広まっていて、いじめという言葉から、オリエンタルな神秘的な逸脱行為が起きていると思われているのではないかということです。

深谷（和）　10年前に、『タイム』の取材を受けたことがあるんですが、その掲載誌をみると、「いじめ」とイタリックで入っていたことを思い出しました。

深谷（昌）　本会議は3日間でしたが、2日間はドイツ側が校内暴力について話し、日本側はいじめの話をして、お互いになんとなくわかったようなわからないような話をしていました。そして2日目のラストに、ベルリン大学の先生から校内暴力の実態のレポートがあり、そこで、仲間を無視したり、本人が嫌がるニックネームで長期間にわたって呼び合うなどという具体例が明かされました。それは完全ないじめだと思いました。

深谷（和）　それをドイツ側の意識では校内暴力にカテゴライズしていたのでしょうか。

深谷（昌）　タイトルが「ゲバルト・イン・デア・シューレ」(Gewalt in der Schule)ですから、「学校内における暴力」ということだと思います。学校内の暴力は、相手に直接暴力をふるうという行為はもちろん、嫌がるニックネームで長い間呼ぶというのも心理的な暴力行為だということでしょう。特に小学校の段階でいうと、そういう心理的な暴力行為が子どもを追い込んでいくという言い方をしていましたね。

深谷（和）　私たちの理解ですと、校内暴力というと、対教師暴力とか、生徒間暴力、器物損壊などであって、いじめはいじめとして

めぐって

独立しているという認識がありますね。つまりいじめは、校内暴力とは一線を画しているような感じがあるので、今の話を聞いて驚いているんですが、ドイツで心理的な暴力を校内暴力に入れざるを得なくなったということは、ドイツでも心理的ないじめがだんだん増えてきているということなのでしょうか。

深谷（昌）　ラベルの張り方のすれ違いみたいなものではないかという気がしないでもありません。というのは、ドイツ側から日本には校内暴力はありませんかと言われましたので、80年代前半にはあったけれど、今は静まりましたとレポートしたんです。そして今度はこちらから、日本ではいじめが問題になっていますがドイツではどうですかと聞きましたら、ドイツではいじめはないというんです。いじめという言葉から連想する何かがあるのでしょう。ドイツはいじめはないが、今多いのは校内暴力だというんです。よく考えてみますと、同じことをいっているのではないでしょうか。

例えば、アメリカではスクールバイオレンスという言い方をしています。一種の校内暴力です。程度の差はあれ、学級の中でお互いがけんかをしたり、こじれる話というのはどこの社会にもあることなのです。

ドイツの校内暴力、日本のいじめ

深谷（和）　ところでドイツ側は、心理的な暴力を重大視しているのでしょうか。それとも、いわゆる校内暴力の方がメインなのでしょうか。

深谷（昌）　研究者の診断として仲直りができそうだというのと、仲直りができそうもないというようにカテゴリーしていったときに心理的な暴力は仲直りできる可能性が強いけれども、それが長期間続いた場合は仲直りが難しいということで、むしろ重要視していました。

深谷（和）　お話をうかがっていると、どうもドイツ側が心理的な暴力といっているいじめに近い行為と、日本でのいじめとは違うのではないかという気がして仕方がないんです。例えば、今の話を聞いていても心理的な暴力は仲直りができることが多いといっているわけですね。しかし、本号に掲載されている調査結果を参照していただきたいのですが、日本のいじめは大部分が仲直りができないんです。いじめの終結の仕方というのは、クラス解体、つまり学年が上がってクラスがバラバラになるとか、卒業など、物理的な集団解体で、いじめが不可能になるというのがダントツなんです。

深谷（昌）　ドイツではいじめ的な現象を校内暴力としてつかんでいたということは事実です。また仮にいじめがあった場合、被害者を救うことが大事だというんです。ですからドイツの場合は、日本でいう中学生くらいになると、加害者と認定されたら、学校から退

深谷和子氏

学を命じるという処置をとっているようです。日本はどうかというので、まず退学はないといったら、それは加害者を甘やかしている、被害者を救っていないと、ドイツ側からかなりクレームがついたんです。

深谷（和）　文部省もやっと重い腰を上げて出席停止もありうるといっていますが、退学ではありませんね。ドイツではいじめに対して、そんなに強行処置をとるんですね。

深谷（昌）　そうですね。

深谷（和）　それはどの段階からですか。

深谷（昌）　子どもたちが自分の行為に責任を持てるという意味でいうと、だいたい11歳くらい、ドイツの学校段階でいうと、一番基本的なのは小学校は4年制で、そのあとが3段階に分かれているんですが、その3段階に分かれたあたりからです。

深谷（和）　小学生のいじめは日本でもあまり質が悪くない。つまり知恵がないから、相手を追い込んで死に至らしめるほどのダメージを与えない。それが中学校段階から悪質化するわけですが、ドイツの場合は5年生くらいから、ある程度自分の行為には責任を持つべきだという一種の子ども観があって、強行処置をとっているわけですね。

深谷（昌）　今日のテーマから少しはずれますが、慶応大学の宮沢浩一教授が、日本では補導される青少年が年間1万人くらいいるがその中で少年院送りになるのが130～140人で、補導されたうちの1.3%くらいしか送られていない。それは奇蹟的な少なさであり、ドイツはその何十倍である。結局、日本というのは、子どもたちを学校なり、家庭なり地域なりがいろんな形で非行というラベルを貼らないで処理しようとしている社会なんだと言っています。

けんか・意地悪、いじめ、いじめ非行

深谷（和）　昔のいじめから現在のいじめまで、データを探りながらどう変質してきたかをみたのですが、日本人が子どもに対する教育的配慮のもとに厳罰を加えなかったというやり方は、少し前までの無邪気で子どもっぽくて、ちょっとは悪いことをするが、それは子どもらしい行為なんだということで見逃せるというような時代はそれでよかったと思います。しかし今のいじめは、悪質化・陰湿化という言葉で表現できるような行為になってきました。それは結局、子どもがおとなに近い悪い行為ができるようにソーシャライズされてしまったということだと思うんです。子どもが情報化社会の中でおとなの知恵を身につけたとか、子ども集団を体験しないでおとなになってしまうなどがあげられますが、子どもを性善なるものとみて、なるべく保護していこうというやり方では、いじめ問題はもう対応できないのではないかという気がしていました。しかし、先ほどのドイツでは心理的なゲバルトで退学になるということを聞くと、ちょっとおそろしい気もします。それを誰が判断するのか、そのくらいのことで退学という、子どもの一生に傷を負わせることをしていいのかなどと考えてしまいます。

深谷（昌）　話は戻りますが、いじめは学級が解体しない限り終結しないのですか。

深谷（和）　割合でいうと、6～7割はクラス解体で終結しているんです。

深谷（昌）　子どもたちの中でいじめを止めるだけの一種の自浄能力みたいなものはないのですか。

深谷（和）　子どもにはもちろん、先生や親にも解決は期待ができないように思います。

これは子ども集団の内部の問題ですから、子どもがおとなを介入させないのです。例えば学級会で話し合っても、数日は納まったように見えますが、すぐに復活するわけです。おとなの力はこの問題に関しては無力だということですね。

深谷（昌）　いじめという言葉の中にいろんな概念が入ってしまっているような気がしてならないのですが、終結がしにくくて陰惨なものと、いたずらというようなものとは何か線の引き方はあるものなのですか。

深谷（和）　この号のはじめにもふれさせていただいたんですが、いじめを3つに分けてみたのです。1つは「けんかや意地悪」、心理的な暴力の軽いものを含め、発達段階の初期に出てくる子どもらしいトラブルです。一方、反対側に位置するのが、カツアゲしたり性的に辱めたりすること。これはいじめというより非行とか犯罪ですから「いじめ非行」という名前をつけました。真ん中に残っているのが、非常に日本的なんですが、無視とか菌ごっこという、いわゆるいじめの本体です。

先ほどのドイツ側の認識は、私が分類した「けんかや意地悪」がかなり入ってきている気がするんです。また、いじめ研究は北欧が本家だといわれています。人権を守る立場から、かなり前からいじめ研究が大がかりに行われているようですが、データをみると3年生、4年生、5年生というように学年が上がるにしたがって、いじめの頻度が下がっています。これは、けんかや意地悪のようなものをいじめ行為として包括しているので、そうした数値がでてくるのだと思います。

しかし今、みんなが悩んでいる日本のいじめは、日本の子どもが置かれている特殊な生活環境、教育環境、つまり情報化とか、少子化などが複合して出てきた、きわめて日本的な現象だという気がしてならないのです。

いじめは一種の楽しみ？

深谷（昌）　いじめに関連して不登校の問題

深谷昌志氏

があります。いわゆる行きしぶりの期間が長びいて慣習化してきた段階から不登校と呼ばれるわけですが、これはほとんどの子どもが体験することです。いじめでは不登校の行きしぶりに相当するのは何ですか。

深谷（和）　けんかや意地悪でしょう。

深谷（昌）　しかし、けんかや意地悪は、どの子どもの社会にもありますね。

深谷（和）　ただ、今の日本では子ども集団の中で成長するというライフスタイルがないし、またきょうだいが少なく、発達段階の最初に発揮されなくてはならない攻撃性、つまりけんかや意地悪を体験することもない。自分の内なる攻撃性を表に出していいかどうかわからないままに、突然集団に入ってしまうというライフスタイルが問題だと思うんです。

深谷（昌）　そういえば、ドイツ側の説明の中で、校内暴力というのは自分の意志を相手に伝達する技術の問題だという言い方をしていて、わりと未成熟な子が自分の意志を無理に通そうとして校内暴力を起こすという言い方をしていたような気がします。

深谷（和）　意志を通すために暴力を起こすというのはよくわかるのですが、いろいろなケースをみて思うことは、今の日本のいじめというのは、一種の楽しみなんです。おもしろいからやる。おもしろいといえば、今の子どもは本当に心からおもしろいと思えるような体験をできないわけです。スポーツをやったり、自然の中で遊んだりというのが本来のおもしろさなんでしょうが、ある意味では、

人をいじめるというのも特別のおもしろみがあるということは否定できませんね。

深谷（昌）　価値観を除けばですね。

深谷（和）　相手が人間ですから、イヌやカメをいじめるよりはおもしろい。しかも最近の子どもは規範感覚が薄い。ですからどんどんエスカレートしていく。大学生たちはこう言うんです。「たいして悪いこととは思っていなかった」と。たいして悪くないんだったら、おもしろさを追求しようとなる。ですから、ドイツ側の自分の意志が通らないからいじめになるというのと、日本のいじめとは違うと思うんです。

考えてみると私たちは、子どもが楽しいと思える時間や場を与えないで、テレビとかテレビゲームで子どもは満足しているんだといいように思ってしまっている。子どもはそういうふうに追い込まれてしまったために、いじめの楽しさを覚えてしまったのではないかと思うんです。

いじめと、問われる学級経営

深谷（昌）　暴論かもしれないけれど、いじめが心配だったら、みんな揃って塾通いをやめればいい。子どもたちが地域で遊ぶようになれば、いじめ的なことはギャング集団の中で肌で体験していく。遊びの群れがなくなって、お互いにいじめたりいじめられたりする体験を持っていない子どもたちが集まってきて不適応を起こすんです。

深谷（和）　それは正論でしょうが、現実的には非常に難しいことではないでしょうか。私は、いじめを終結させるにはクラス替えをしたらいいと思う。日本の場合は2年に1度のクラス替えでずっと授業をしていますが、クラスの壁を薄くするか、取り払ってしまって、大学と同じように教科によってクラスを替える。新たにいじめが起きたら、またクラスを新しくしていく。しょっちゅうクラス替えをやっていけば、子どもはいじめをやれば、またクラスが替わると思っていじめをしなくなると思うんです。

深谷（昌）　しかし、少子化でほとんどの学校で多くて2～3クラスということを考えると、クラス替えも難しいのではないか。

きちんとした指導ができる担任のクラスではけんかのようなことはあるにしても、深刻ないじめはないということは、よく聞くことです。外から見ても明るい学級か、暗い学級かはすぐわかるというんです。そう考えますとクラス替えをしても、未熟な先生ではまたいじめが起きるのではないかと思います。

深谷（和）　大学生の聞き取りでわかったのですが、明るいクラスだからいじめが起こらないのではなく、起こっても非常に短期間に終わったり、発展しなかったり、他からの介入が功を奏するということなんです。その意味では学級経営のあり方が問われるのではないでしょうか。

深谷（昌）　もう1つは日本的ないじめというのは、学級王国というのが背景に成り立っているんですね。学級王国というのは、いい悪いは別として、日本の教育の本質的なものです。学級は家族のようなもので、その中でみんな仲よく暮らしていこうという、幻想的な家族論のようなものです。そのおかげで、日本の教育は落ちこぼれを出さないでいる。先生たちも担任になるとはりきります。だから、欧米流の個人差を認めた学校というのが日本で作れるのかとなるとかなり見通しは暗いのです。確かに個別化することによって、いじめはなくなるでしょう。しかし欧米のように、子どもたちなりに一人一人が自立していれば問題はありませんが、日本の子どものようにもろいと、ばらばらにしたときにもっと悪化する可能性がある。

深谷（和）　小学校6年間、2年ごとにクラス替えをして学級単位で行動するというのは30年前までは通用したのかもしれません。しかし、子どものライフスタイルがこれほど変わってくると、5～6年になったらクラスをもう少しばらばらにほぐすというか、学級の授業もあるけれども、そうでない授業もある

というのが今の子どもの成長に沿った学級経営、学校経営ではないかと思うんです。

深谷（昌）　今の複数担任制の実態などをみていると、それはなかなか難しいと思いますね。

子どもの発達加速と教育制度の見直し

深谷（和）　アメリカで6年生を中学校に入れる動きがありますが、これは子どもの発達加速によって、従来の教育制度が問い直されているということではないでしょうか。小学校の朝礼に行くと、1年生はまだ可愛いくて幼児体型をしていますが、6年生の男の子など髭がはえている。そういう子どもたちを1～6年生ということではなく、低学年、中学年、高学年というようにクラス経営を変えていく。そういう対応ができないと、いじめの問題も解決していかないのではないかと思います。

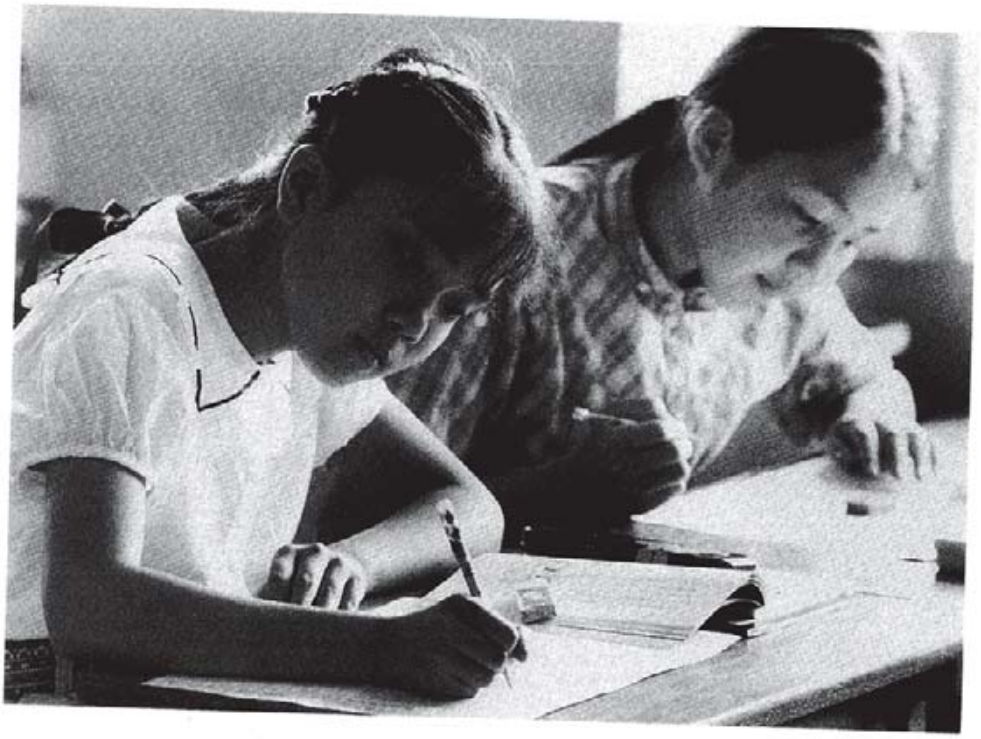
深谷（昌）　それができても日本の場合は、一人一人の子どもが自分の行動に責任を持っていないのではないかという気がします。わりと他人依存型です。そういう未成熟な子どもに1人で歩きなさいといっても無理があるのではないか……。ですから、1人で歩くような形をどこかで指導していかないといけないのではないかと思います。

深谷（和）　子どもにそういう将来があるからこそ、親も先生も年齢が低いときにそういう形のソーシャリゼーション（社会化）をしていけばいいのではないでしょうか。

例えば学校5日制にしても、受け皿ができてからといっていたら、いまだにできなかったと思う。いろいろな批判はあったけれども文部省は踏み切りました。親の方もそれなりの対応をやっています。

深谷（昌）　子どもたちの個別的な動きを認めるためには、今の学校では場所がない。少人数で教育しようとすれば、いろいろなサイズの教室が必要なわけです。先生も複数担任制より必要です。そして大事なことは、もっとお金が必要になってくるということです。

深谷（和）　そこまでいかなくても、私はいじめというのは25人、20人学級になるとかなり解決すると思います。1人の先生が30数人



の子どもの気質や特徴、能力をのみこんで学級経営をしていくよりは、やはり25、20人の方がやりやすいと思いますし、クラスを少人数化することによって、個別化も自動的に促進されるのではないかと思います。

学校外の問題は親の責任

深谷（昌）　日本ではいじめに限らず、子どもがスーパーで万引きしたら、警察は学級担任か生徒指導の先生に連絡します。ドイツでその話をしたら、それはとんでもない話だというんです。日本は放課後に起きたことでも夜中に起きたことでも、学校が対応する。欧米の場合は、学校の中の問題は学校、学校の外の問題は親の責任なんです。中学校の先生方はかなり過労ぎみです。その意味でいうと放課後や夕方の部分を解放してもらえると、学級の中に全部を集中できるのではないかと思います。

このところ、いろいろな人にお会いしていて思うことは、不登校の場合は臨床心理の専門家の発言が非常に参考になっているんですが、いじめについてはなんとも頼りないという感じですね。

深谷（和）　不登校の場合は学校に行かないので、家にいるか、カウンセラーに援助を求めるかです。ところが、いじめというのは子ども集団の内部の問題ですから、先生も親もわからない。カウンセラーもタッチできません。いじめを知っているのは子ども自身で、誰も専門家がいない。だから、先生の言うことも、親の言うことも、カウンセラーの言うことも頼りないのではないでしょうか。

深谷（昌）　いじめ問題についての頼れる専門家というのは非常に見つけにくいですね。

深谷（和）　そうですね。しかし、データでいじめの終結をみると、1番は先ほど申し上げたようにクラス解体、それから大きく水が空いてはいるものの、2番目は先生です。少ないといっても、先生の力は大きいんです。その意味ではいい学級経営を含めて、いついじめ集団にどういう形で介入していったらいいかとか、親にどう連絡したらいいかとか、本人にどうサポートしたらいいか、いじめている子どもたちをどう扱ったらいいのかを含

めて、一人一人の先生方にいじめの専門家になってもらうことだと思うんです。いじめ対策にもいろいろとノウハウがありますが、そのノウハウをしっかり確立させるのは5年、10年かかると思います。

深谷（昌）　今の日本の学校は枠があって、全然選択の余地がないですね。今、欧米で広がってきているのは、親たちの権利を認めて学校の選択権を認めようではないか。あるいは（実際は言うほど使ってはないが）先生の選択権を認めようではないか。同じ日の中で別の学校に行けるというような自由がみつかっていけば、いじめは少しでも解決すると思います。

教育にも規制緩和が必要

深谷（昌）　ところでこの頃、よく規制緩和という話がでますが、教育にもものすごい規制緩和が必要なのではないか。明治の時代には沖縄から北海道まで、同じ教室、同じ机でよかったでしょうが、チョイスができる時代に学校だけが選べないというのは、何か不適応が起きたときに逃げ場がないですね。

深谷（和）　今の学校の形が子どもの成長にフィットしなくなってきていて、いろんな形で手直しが必要なのだと思います。

深谷（昌）　学校が柔軟度を増していって、子どもたちが学校を選べると、ある部分のいじめは減ってくるのではないか。しかし、最後に残ってくるのは、子どもたちがなんとなく善悪の規範感覚をもたなくなっているということですね。

先だって『親孝行の終焉』（黎明書房）を書いたときに考えたことは、日本の場合は戦後、儒教を否定したということでした。韓国には儒教があります。ヨーロッパに行くと、崩れたといってもキリスト教文化があって、アメリカ社会ではデモクラシーへの信頼が強い。つまり、その社会の中心になっている価値みたいなものがある。

深谷（和）　それが欲しいということは、みんなが願っていると思うのですが、それでは日本の場合はその可能性はないのでしょうか。

深谷（昌）　今の状況は完全に空洞化してしまったということでしょうか。

深谷（和）　それを埋めるものは何ですか。アメリカ型でしょうか。

深谷（昌）　そうでしょうね。ボランティアなどを含めて、みんなでお互いの権利を認めていこうというような、よい市民としての教育、人権教育が必要だと思います。

深谷（和）　いずれにしろ、このいじめ問題は10年、20年、30年と続いていくと思うんです。小手先でいじめを抑えこもうとしてもだめだと思います。抜本的な子どもの成長環境なり、学校制度なりをこの機会に見直して、新しい対応をしていかなくてはいけないという気がします。

いじめに関するアンケート

ご承知のように、いま教育界は早急に「いじめ」問題への対応に迫られていますが、残念ながらおとなには「いじめ」の実態すら、正確には把握できていないかのような状況があります。

「いじめ問題」の専門家は子ども自身ではないかという指摘もあるほどで、どうしても、子どもの口から直接１次資料を得る必要がありますが、ご承知のように、それは大変難しい状況があります。

そこで大学生の皆さんに、小・中学校時代を回顧していただくことで、「いじめ」についてもう少し新しい資料に触れ、この問題について対応の糸口を探りたいと、この調査を企図いたしました。

お手数ですが、何卒、ご協力をお願い申しあげます。

東京学芸大学・学校問題研究会

なお以下の「いじめ」とは、正確な定義を経たものではなくて、当時あなたが何となく「（集団で）いじめた・（集団から）いじめられたと感じた」範囲でご回答くださって結構です。（書き込みなど、ご自由にお書きください）

1）はじめにうかがいます。

1．あなたは　①男性　②女性

（短期）大学　（1．2．3．4）年生

2．あなたの小学校は　（　　）←都道府県名

①公立　②私立　③国立

3．あなたの中学校は　（　　）←都道府県名

①公立　②私立　③国立

2）小・中学校時代、あなたのクラスに、「いじめ」がありましたか。
（暴れん坊が「１人」いて、周囲に暴力をふるっていたようなケースは含めません。あくまで、「集団が個人にしていたイジメ」だけを、「いじめ」と考えることにします。）

1．小学校高学年　いじめが　①あった　②なかった

中学校３年間　いじめが　①あった　②なかった

2．小学校時代に、あなたのクラスで、いくつぐらい「いじめ」がありましたか。

クラスで［　　］ケースぐらい

①そのうち、あなたが「いじめられていた」ケースは［　　］

②あなたが「いじめている集団に近い位置」にいたケースは［　　］
（またはイジメ集団の中にいた）

③あなたとあまり関係のない所で起こっていたケースは［　　］

近所とか塾などで「いじめ」のケースがありましたか。もしあったら、具体的にお書きください。

（　　）

3．では中学校時代に、いくつぐらい「いじめ」がありましたか。

クラスで［　　］ケースぐらい

①そのうち、あなたが「いじめられていた」ケースは［　　］

②あなたが「いじめている集団に近い位置」にいたケースは［　　］
（またはイジメ集団の中にいた）

③あなたとあまり関係のない所で起こっていたケースは［　　］

部活動とか塾などで「いじめ」のケースがありましたか。もしあったら、時期や具体的な様子をお書きください。

（　　）

PART 1

1）次からは、小学校高学年の時の「いじめ」（高学年にいくつもあったときは、いちばん印象的な「いじめ」）の様子を、お聞かせください。
いじめが全くなかった方は、ＰＡＲＴ２へ進んでください。
その「いじめ」は、誰が対象で、いつ頃から始まりましたか。

1．いじめられていたのは、誰でしたか。
（複数の場合は人数も書いてください）

①あなた１人

②あなた以外の子（1．男子　2．女子）→複数の場合（　　）人
＊性別も

2．続いた期間は、ほぼ

↓

小学（　　）年の（　　）月ぐらいから

（　　）年の（　　）月ぐらいまで

3．クラスでしたか、塾などでしたか。

（1．クラス　2．塾など→　　）

2）その「いじめ」について、下のどれかに○をつけてください。

①クラス（塾など）の大部分が参加していた「いじめ」

②一部の（普通の）子が、していた「いじめ」

③一部の、つっぱり傾向のある集団のしていた行為

④ ①②③以外（具体的にお書きください）

（　　）

3）その「いじめ」は

極めて悪質	かなり悪質	少し悪質	あまり悪質でない	悪質でない
1	2	3	4	5

4）その「いじめ」を、当時知っていたのは誰ですか。

1．担任は

（①知っていた　②たぶん知っていた　③たぶん知らなかった）

2．クラス（塾など）の子は

（①全員知っていた　②知らなかった子も1部いた　③知らない子の方が多かっただろう）

3．いじめられていた子の親は

（①知っていた　②たぶん知っていた　③知らなかった（だろう）　④わからない）

4．主にいじめていた子の親は

（①知っていた　②たぶん知っていた　③知らなかった（だろう）　④わからない）

5）どんないじめ方をしていたのですか。当てはまるものに、全て○をつけてください。

①悪口
②無視・仲間外れ
③菌ごっこ
④金品のカツアゲ
⑤使い走り
⑥暴力
⑦嫌な仕事、役割を押しつける
（具体的に）
↓
（　　）

⑧物を隠す
⑨机の中を荒らす
⑩落書き
⑪物などをこわす
⑫その他、具体的に↓
（　　）

6）なぜ、「いじめ」が終わったのですか。当てはまるものに、全て○をつけてください。

①先生の働きかけ
②友人の働きかけ
③親の働きかけ
④本人の力
⑤学級会で話題にしたこと
⑥クラス替え
⑦卒業など

⑧いじめられている子の転校（塾）など
⑨次のターゲットができた
⑩その他
↓
（　　）

7）（あなたが、いじめられていた場合）
「いじめ」をやめてもらうために、あなた自身は、何かなさいましたか。

①親に話した
②担任に話した
③その他のおとなに話した（具体的に）→（　　）
④友だちに話した
⑤いじめている子たちに働きかけた（具体的に）→（　　）
⑥その他

その結果どうなりましたか。
（　　）

8）（あなたが、いじめ集団にいたり、または「いじめ」と関係のない傍観者だった場合）
「いじめ」をやめさせるために、あなた自身は、何かなさいましたか。

①全然しなかった

②多少働きかけてみたが、途中で断念した

③かなり働きかけてみたが、うまくいかなかった

④働きかけて、成功した

→その場合、具体的な方法をお聞かせください。

（　　）

①と答えた方に。
あなたが全然働きかけなかったのは、なぜですか。いちばん当てはまるものに○をつけてください。

1．自分や自分のグループとは、関係ないことだから

2．いじめられた人にも、それなりの理由があるから

3．仕返しされそうでこわかったので

4．何となく

5．その他→（　　）

9）いじめられていた子の理由は、今になると思い当たりますか？

①全く思い当たらない（理不尽）

②成績がよい子への妬みのようなもの

③えばっていた子への反感

④何となく、その子に弱点や、性格的特徴があった

→よければ具体的にお書きください。

（　　）

10）今、同窓会（クラス会など）があったらどうですか。いじめが後を引いてクラス会に出たくない気持ちがありますか。

①絶対出たくない

②できれば出たくない

③あまり、こだわっていない

④全く平気

11）いじめられた体験のある人だけお答えください。
いじめられたことは、あなたの現在にどう影響していますか。

①まだマイナスに影響を残している

②何の影響も残していない

③むしろプラスの影響を生みだした

④マイナスもプラスもあった

↓具体的には

（　　）

PART 2

1）次からは、中学校の時の「いじめ」（いくつもあったときは、いちばん印象的な「いじめ」）の様子をお聞かせください。いじめが全くなかった方は、これで結構です。
その「いじめ」は、誰が対象で、いつ頃から始まりましたか。

（省略）

15）「いじめ」は、なくせると思いますか。

（1．なくせる　　2．なくせない）

その理由

（　　）

最後に――――――

ありがとうございました。
これ以外のことについて、もう少し私どもに詳しく話してもいいとお考えでしたら、別の日（1、2か月以内）に、大学で昼休み等に、お話を聞かせていただければ、有り難いのですが。または、お電話での補足でも結構です。その場合は、下にあなたの電話番号とお名前をお書きくだされば、改めて、お電話させていただきます。

お電話番号	
お名前	

↓

（1．インタビューでもいい　　2．電話による補足ならよい）

ご協力を、心から感謝いたします。